

Henry David Thoreau

尾 形 敏 彦

I 軌 跡

対英戦争（1812. 6. 18. —1814. 12. 24.）はニューオルリーonzの戦闘でアメリカ軍が大勝（1815. 1. 8.）して2月に終結した。（外交上の終結と現地における戦闘終了とは日時が相違するものである。）この頃からユートピア建設の夢が急速に広がり、多数の移民が新大陸アメリカに流入した。北部移民はイギリス的資本主義社会建設に、南部移民は奴隷使用の綿花栽培による自由社会建設に、西部移民はフランス革命理論に基づく新社会建設に、それぞれ激しい意欲を燃やした。こういう資本主義初期の時代に、ピューリタニズムの雰囲気はまだ残っていた田舎町コンコードにソーロウは生まれ（1817. 7. 12.）育った。経済的に苦しいソーロウがアルバイトをしながらハーヴァード大学を卒業した1837年は不況で、彼もブラウンスン⁽¹⁾やビグロー⁽²⁾牧師や同級生などに就職依頼状を書いた。それらのうちニューヨーク州北部のバターナッツ村で教鞭をとる同級生ヘンリー・ヴォーズあてに、「君が期待したように、霧のなかで溪流が涼しい音を立てながら泡立つ渦を巻いて流れているかね。村人達は抜けないニュー・イングランドの人びとのように金銭万能主義者になってはいないかね⁽³⁾」などと彼は書いた。1837年に、はじめてソーロウに会ったエマソンは、その翌年、彼のことを今までに会った誰よりも純粋で正直な若者だから彼が非常に好きだと言った。彼はエマソン同様に精神的で自然生活に憧れていた。しかし、こういうソーロウでも資本主義社会体制に組み込まれないわけにはいかなかった。彼はコンコードの公立学校で教員生活を体験した。しかし、笞打ちの罰を認める教育法に反対して、わずか数週間で辞職した。この教員生活によっ

て与えられた嫌な説明癖は生涯抜けなかったと彼自身回顧した。その後、不況のために再就職先がなく、翌1838年夏には自宅で学習塾を開いた。数か月後に兄ジョンが参加して塾は活況を呈した。しかし、兄の病氣(後に破傷風で1842. 1. 11. に死去)によって塾を閉鎖(1841. 3.)し、彼は1年間、スターテン島のウィリアム・エマスン(R. W. エマスンの兄)家の住込み家庭教師(1843. 5.)としてニューヨーク生活を体験した。その後は兼業農家の両親の家に同居して鉛筆製造の手伝いや、正確さを買われた測量仕事などによって生計を立てた。アルバイトで最少限度の生活費を得れば十分で、生活のための努力は無駄な必要悪だと彼は考えたから、自然観察、瞑想、読書、執筆などに大部分の時間を使った。このような趣味に生きる態度は勤勉努力を高く評価する周囲の人びとからは軽蔑の白い眼で見られた。「私は実務に向かない人間です。社会の目的を推進するというような仕事に私を使うのは、頑丈な船材の代りにかげろろを使うようなものです。明日は鉛筆製造業者になる運命の私は、しばらく地上でアドメートス王に仕えたアポロ神⁽⁴⁾に同情します」などと書いた。彼は真面目一点張りの人間で、鉛筆製造や測量に関しては有能であったかも知れないが、たき火の不仕末で山火事を起したこともあり、後には、「私の眼は経験によって鋭くなったので、多くの人びとがいかに賤しく、些細な生活をしているかがよくわかる。……一般大衆は静かな絶望⁽⁵⁾の生活を送っている」と言ったりして、人びとがいかに無意味で無駄な生活をしているかということを力説したことなどから、冷淡な変人だと人びとに敬遠された。しかし、エマスン、エラリー・チャニングなどの友情と両親の家という避難所をもっていたソーロウは幸運であった。

ソーロウは有効に人生を送るためには、物質欲と社会的束縛を否定して永遠の真実を追求しなければならないと信じて自然に迫った。彼にとって、自然は永遠というものの啓示であり、神聖な存在であった。さらに、自然と人間とは同一法則によって支配されるべきだが、第二義的なものによって阻害されているというエマスンの考えと同じ考えをソーロウはもっていた。そのために、ソーロウは間接的なものをすべて切捨てて自然と人間との直接的関係を発見しようと努力した。彼の目には、事実の客観的表現だけを追求する科学者は自然を

死物として扱っているとしたか映らなかった。人工によるものは自然と直接には結びつかないものであって、自然界にだけ自然と人間との対話があると彼は考えた。『一週間』⁽⁶⁾ (1848) のなかの雑談的部分をローウェルは「静かな川の旅をしている時に読者を水中に振り落とすようなものだ」と批判したが、この部分にこそ自然と人間の対話が聞かれるのではないか。ソーロウの自然は、『一週間』のなかでは「かさかさ鳴る木の葉や穀物や葡萄の房の向こう側」にあったり、「10月の夕陽」のなかや「空の色」のなかにあったりするが、終局的には沈黙のなかにあった。素晴らしい沈黙は野性的だとソーロウは感じた。彼が自然と人間の共通点として発見したものはこの野性であった。『一週間』のなかで、文芸作品のなかで読者を魅惑するものは野性的なものだけだと彼は言った。ソーロウが自然界に求めたものは野性であって、西部大草原にあこがれて東部物質文明社会を拒否したのも野性を求めたからで、この点に彼の社会評論家としての立場がある。そして、自然界には人間界に見られる無駄な複雑さがないということに気づいて、彼は簡素化を求めた。そのために彼はウォルデン池畔の簡易実験生活 (1845. 7. 4. - 1847. 9. 6.) を実行した。この2年2か月の経験は、彼の生き方に大きな影響を与えた。ソーロウは、すべてを単純化して、矛盾したものを融和統一しようと考え、「われわれの生活は実に些細なことに浪費されている。正直者はほとんど10本の指を数える以上には必要なものをもたない」⁽⁷⁾ と言って簡易生活を賛え、「仕事、仕事と言うが、われわれは大切な仕事なんかしていない。われわれは舞踏病にかかっているので頭を静かにしておくことができないのだ」⁽⁸⁾ という結論に達した。彼は禁酒禁煙を実行し、コーヒーや紅茶など刺激物を避け、肉類を不快なものとして拒絶し、パンとジャガイモを主食にした。⁽⁹⁾ 簡易生活によって清純高貴な心境に到達できるとソーロウは確信した。恐らく、こんな風に信じたのは肺結核による神経過敏と兼業小作農の息子という貧しい生活環境に育ったことが原因であったと思われる。ハーヴァード大学在学中にしばらく休学したのも肺結核のためであり、この病気によって満44歳で世を去った。彼は、野蛮人の強健と文明人の知能を結合できないもの⁽¹⁰⁾のかと人一倍感じたことであろう。

伝統と妥協の世界を嫌ったソーロウは愛情や名誉や金銭よりも真実を求め、

世間から離れて自分を見つめる生活を選んだ。複雑化へ向かう文明の流れに逆らって、彼は人びとの欠点を取り除く方法として単純の効用を重視した。そして、単純化への出発点をウォルデン生活に求めた。やがて、この生活が一応安定した時、「私は森へ行行ったと同じ十分な理由があって森を出た。私には別にすべき多くの生活があって、森の生活だけにこれ以上の日時を費すことはできないと考えたからである⁽¹⁰⁾」と言ってウォルデン池畔を去った。別の生活とは社会における政治的生活のことであった。彼はニューヨークで知り合ったグリーリー⁽¹¹⁾あての書簡のなかでウォルデン生活の反省と物の見方をこう書いた。「荒っぽい仕事をなんでもやりました。1845年7月から1847年9月まで森のなかで、しっくい塗りのちょっといい暖かい小屋で独居生活をしました。手作りの小屋です。必要品は自分で手に入れ、自分のことだけを考えて暮しました。私以上に、汗をかきたければ別ですが、なにも額に汗して生きてゆく必要はないでしょう。金がなくてやってゆけないなら（ほんの少しあればいいでしょうが）、1日1ドルの労働者になるのがもっとも偽りのないやり方です。とてもそれだけではと思われるかも知れませんが、何種類かの労働をやった経験から専門家として私は言います。なぜ、学者はいつも運が悪いと不平を言うのでしょうか。『むずかしい知識の探求』というようなことを——あるいは、詩人の生活はどれほど後援者に頼っているとか、屋根裏部屋で飢えているとか、ついに気が狂って死ぬとかいうようなことを——あまりにも屢々耳にします。実は、この話の裏が聞きたいのです。学者が、もし、一般人よりも本当に賢明ならば、なぜ、時には働かないのでしょうか。すぐれた知識で、なぜ、物がなくてもやれるようにしないのでしょうか。もし、賢人は不幸だとあなたが言われるならば、どういうようにして、賢人を不幸な凡人と区別するのでしょうか」と書いた。ソーロウは、とくに金銭を軽蔑したように思われる。例えば、「金銭を得る方法は、ほとんど例外なしに人を墮落させる。金を稼ぐためにだけ何かをしたということは、まったく怠けていたのと同じか、それ以上に悪いことをしたのである。……社会が金を出そうという仕事はもっとも不愉快な仕事である。その報酬は人が人間以下になることに対して支払われるのである⁽¹²⁾」とか、「金銭のために仕事をするような人を雇わないで、仕事への愛情のために仕事

をするような人を雇いなさい」などとソーロウは書いた。結局、孤独生活も社会生活もソーロウには満足できなかった。彼は精神生活と物質生活に対して、別の態度による二重生活をした夢想家兼実行家であった。例えば、彼は家においても旅行者で、読書による世界旅行に出発し、あまりにも概括的だが、驚くほど広い足跡を残した。⁰⁴ 一般に、作家は想像世界と現実世界という二つの異質な世界を心にもっている。さらに、ソーロウは自分を批評する客観性と行動する自分という主観性とを強く意識していた。この分裂した二つの世界を統一融和しようとすれば、宗教的世界に入らざるを得ないであろう。ソーロウは東洋の書物によってヒンズー教や仏教の寺院を歴訪し、すべての宗教が気に入った。「私は何か一つの特定の宗教なり、哲学なりを選ばない」と彼は語った。⁰⁷ これを素朴に受けとめるとソーロウの宗教を世界宗教と呼ぶのがいいように思えるが、この態度は他人の信仰を妨害しないという個人主義から出たもので決して世界宗教というようなものではない。広く遠く眺めることを考えたようであるが、彼には一度に一つのことしか見えなかった。例えば、死の数日前に奴隷制度廃止論者の友人ピルズベリー元クエーカー教牧師が訪ねてきて、「真黒な河の淵が近づいたと思われる時、その河の彼岸がどんなふうに見えるか」とソーロウに聞くと、彼は「一度に一つの世界」と答えた。⁰⁹ 現在を生きることがすべてだと考えていたソーロウ（1862. 5. 6. 9 a.m. 死去）には、死は現実でなくて想像にすぎなかった。彼には来世とか回心とか罪とか救済とかいうようなものは想像上の遊戯であった。神の前に立つ時でないかぎり、神に問いかけるというようなことは彼には考えられなかった。彼は信仰の対象としての宗教をもたなかった。そのために、彼には教会へ行く必要は全くなかった。彼の態度は独善的だと言えそうかもしれないが、一炊の夢の優劣を誰が問えよう。

II 作 品

ソーロウは青年時代から詩作をしたが、エマソン同様に小説や戯曲には目もくれなかった。彼は生前2冊の単行本を出版し、死後に評価された文人である。処女作品はエマソンの尽力で出版した『一週間』である。これの大部分は

ウォルデン生活中に書かれ、全額自費出版であった。ソーロウは日記にこう書いた。「この1、2年間は私の本の出版社——名ばかりのものだが——は、売れないで困っている『一週間』の処理について再三手紙を送ってきたが、ついにこの本が占領している地下室の一部を使用したいとほのめかしてきた。それで私は全部送ってもらうことにした。今日、荷馬車に山積みになって送られてきた。——初版1000部中の706部で、4年前に私がマンロー社から買い取って以来支払いを続けて、いまだ払い終わっていないものである。」第二の書物はグリーンリーの尽力で出版した『ウォルデン』(1854)である。これはソーロウが7回も書き直したもので、文体にも内容にも配慮が行き届いていて、これから彼の芸術観がよくうかがえる。しかし、『一週間』よりも多少よく売れたという程度で、作家として独立できるだけの自信を与えるようなものではなかった。これらの両作品はエマソンをはじめとして、チャニングなど出版を援助した少数の友人達だけに評価されたにすぎなかった。

ソーロウの作品が売れなかったのは、イギリス風な作品が一般に求められていたのに、両作品ともアメリカ風であったからだと言えよう。彼は外国旅行記をよく読んだが、海外旅行をしなかったのは健康とか経済とかの理由のほか、その必要性を認めないほどの一種の愛国心の持主であったからである。彼の両代表作品よりも大学生時代から死の直前まで彼が書き続けた日記(1837—61)に注目すべきかもしれない。これには彼の瞑想や自然の靈感などが書きこまれている。ソーロウもエマソン同様に、多くの場合に作品の素材を日記に求めた。彼の日記は内外両面の生活記録だから、これを彼の自叙伝と呼ぶこともできる。この日記が彼の手作りの櫥の箱に保存されていたのは、『一週間』と『ウォルデン』を失敗作だと感じた彼がこの日記を代表作品だと想像していたからであったと思われる。

ソーロウは、豊かだということは貧しいということであり、豊かさを手に入れるためには徹底的に貧しくならなければならないと考えたから、「生活はもっとも富める時にもっとも貧しく見えるものだ」などと言った。物質を無視すればするほど精神的に豊かになると信じたソーロウの主張は、同時代人達には近代文明に対する挑戦のように思われた。そのために、彼の評価は遅れ、その

死後から開拓線が消滅した頃にかけて、ようやく自然観察者として注目され、彼の作品が出版されるようになった。

1863 *Excursions*

1864 *The Maine Woods*

1864 *Cape Cod*

1866 *A Yankee in Canada, with Anti-Slavery and Reform Papers*

1881 *Early Spring in Massachusetts*

1884 *Summer*

1887 *Winter*

1892 *Autumn*

1893 *Works* (Riverside Edition, Houghton Mifflin)

1894 *Letters* (Familiar Letters, F. B. Sanborn ed.)

1906 *Works* (Manuscript Edition, Bradford Torrey & Francis H. Allen eds.)

20世紀に入ってから、彼が自然観察者としてだけでなく、思想家、評論家としても認められるようになり、1917年にはコンコードでソーロウ生誕百年祭が挙行された。1929年の大恐慌によって現代アメリカ文明に対する批判がその頂点に達した頃からソーロウは広く見直されるようになり、彼の作品と研究書は続々と出版された。なかでもキャンビーの⁽²⁴⁾評伝は1939年から40年にかけてベスト・セラーになり、1941年にはソーロウ協会が⁽²⁵⁾設立され、定期的パンフレットも出版されるようになった。

ソーロウが長い間、評価されなかったもう一つの理由は彼が誤解されたからである。一流批評家による偏見は長期間にわたって大きな影響を与えるものである。当時の文壇の重鎮であり、彼の母校ハーヴァード大学教授であり、外交官としても活躍したローウェルの⁽²⁶⁾批評がそれであった。名門出の貴族的ローウェルが貧しいソーロウを身のほど知らずの田舎者と見下したのは、当時としては環境の相違からやむを得なかった。ローウェル編集の「アトランティック・マンスリー」第1号に寄稿したソーロウが第2号への寄稿文のなかで、「松は私のように不滅であり、多分、天までも伸びて、そこで私の頭上に聳えるで

あろう」⁶²とメインの森の松を描写した部分をローウェルが無断削除するという事件が起った。ソーロウはローウェルあての書簡⁶³で削除は侮辱だと怒り、8月号に削除部分を掲載するように要求した。しかし、ローウェルはそれを無視したにとどまらず、ソーロウを利己主義の怠け者だと酷評した。さらに、ソーロウという男は奴隷解放運動が政治活動に発展すると、この運動を軽蔑し、冷淡な傍観者になったと非難した。ソーロウは政治嫌いであったが、奴隷解放問題には大きな関心をもち続けた。彼は「政治と道徳が別であることを、政治は道徳上の正義を保証できず、便宜的なことだけに関心をもち、当選しそうな候補者——いつも悪魔だが——を選ぶという事実を、人類は永久に悟らないのだろうか」⁶⁴というように政治問題と道徳問題の間に一線を画していた。さらに、ウォルデン生活に関しても、ローウェルは自然の生活を自慢するような人間は感傷的な人間嫌いで、自分についての不安な気持ちを慰めているにすぎないとソーロウを批判した。しかし、ウォルデン生活は逃避というよりは人間生活の再吟味というべき積極的な面をより強くもっていた。憤慨したソーロウは、この事件以後、ローウェルの雑誌には一切寄稿しなかった。しかし、長いものに巻かれる世の常として、人びとは、ローウェルが有力者であるために、ソーロウを忘れ去り、彼の名が出てエマスの垂流ぐらいにしか思わなかった。あるいは、文豪スティブソンのソーロウ批判にも注目すべきである。文学とは娯楽であり、作家は人生を脚色して面白おかしく物語ればよく、一種の売春婦だという意見をスティブソンは抱いていた。こういう文学観に対して、ソーロウは想像力を通過した事実こそ最高の詩だと主張し、真実の思想もなく生活もない小説などは読むに価しないと言った。彼はまた、「簡明な言葉こそ、いつもその必要性が痛感されている」⁶⁵という意見をもっていた。文体とは技巧であり、作品内容とリズムは一致していなければならない、そのためには訓練がもっとも必要だと考えたスティブソンは、文体は作者の人格から生まれるというソーロウの文体論など問題にしなかった。たしかに、『市民の反抗』や「ジョン・ブラウン隊長弁護」などは、ときどき指摘されるように時間不足のために粗雑（これに関しては後でもう一度ふれる）で、批判されてもやむを得ないが、『ウォルデン』にはソーロウの技巧がよく読みとれるからスティブソン

の批判をそのまま肯定するのは無理であろう。2週間の舟遊を1週間に、2年2か月のウォルデン生活を1年にしているように両作品とも彼の実験体験の忠実な記録ではない。彼は象徴という技巧によって客観世界を主観世界に変え、物質を精神に変えた。『市民の反抗』は現実ではなく理念の世界を書いたものである。政府に反撃する正義漢ソーロウを理解しようとし⁶⁴ないホームズの目には彼は近代文明破壊者としか映らなかった。これらの有力文人の批判のためにソーロウ評価は大幅に遅れた。20世紀に入ってソーロウ評価がはじまり、彼はエマソンと肩を並べ、やがて、エマソン以上に評価されるようになった。しかし、つぎの研究などはソーロウを過大評価しているのではないと思われる。

William Ellery Channing II: *Thoreau, the Poet-Naturalist*, F. B. Sanborn (ed.), new enlarged edition, Charles E. Goodspeed, Boston, 1902.

Henry S. Salt: *The Life of Henry David Thoreau*, 1890.

Gilbert P. Coleman: "Thoreau and His Critics," *Dial* XL, 1906., pp. 352—56.

III 『ウォルデン』

ソーロウの代表作品は『ウォルデン』である。本書の構成に関して注目すべきことは、マシーセン⁶⁵やシャーマン・ポール⁶⁶などをはじめとして多くの研究者が指摘しているように、その構成原理が季節のめぐりだということである。ソーロウの経験と回想を語る「読書」("Reading")と「音」("Sound")と「孤独」("Solitude")の三章で夏がはじまり、「ベーカー農場」("Baker Farm")と「より高い法則」("Higher Laws")と「野性の隣人」("Brute Neighbours")の三章で夏が終る。続いて「暖房」("House Warming")からはじまる経験と回想に入る。冬である。冬は「春」("Spring")と「結び」("Conclusion")で自然の再生を期待して終る。このめぐりを古木の枯板から現われる虫の話を引用して象徴的にソーロウは語った。「ニュー・イングランドに広まっているこの話は誰でも聞いたことがあるだろう。はじめはコネティカット州で、それからマサチューセッツ州で農家の台所に60年間も置かれていた林檎の木の古木の

乾いた袖板から美しい丈夫な虫が生まれた話である。その卵の外側に広がっている年輪を数えると、古机が作られた時より何年も前に、この林檎の木が生きていた頃に産みつけられた卵が孵化したものであった。コーヒーわかしの熱にでも暖められて孵化したのであろうが、その時には、この虫が板を噛む音が数週間も聞かれたという。この話を聞いて、復活と不死に対する信仰が強められるのを感じない者がいるだろうか⁶⁹、あるいは、「われわれの生命は川の水のようだ。今年はこの川が誰も知らないほど水かさを増して乾いた高地を水浸しにするかも知れない。今年が特別な年になり、すべてのじゃこうねずみを溺らせるかも知れない。われわれが住んでいるところは昔から乾いた陸地であったわけではない。科学がその洪水を記録する前に水が洗った岸辺を、今では遙か内陸に見うける。⁶⁹」

つぎに、『ウォルデン』に見られる展開は円周的であると同時に向上的である。例えば、本書のなかでもっとも哲学的な「より高い法則」は自然の第一のめぐりである夏の終りに出てくるから、第二のめぐりである冬の終りの「春」と「結び」に對置される。そして、「春」と「結び」の経験は「より高い法則」の経験よりも強烈である。季節のめぐりと弁証法的という構成原理をもつ『ウォルデン』は簡素化への努力と人間がもつ二重性の認識と「より高い法則」の暗示という三つのテーマをもっている。

第一のテーマは、複雑から単純への移行の重要性を強調することである。彼が簡素化を重視するようになったのは体質的なものだが、直接には、自己教育と余暇の意義を彼に教えたW. E. チャニング⁶⁹の自然は神のイメージだという考え方とソーロウ自身のプラグマティックな物の見方によるものである。これらが複雑に混合して彼の簡素化への努力が生まれた。「関心事は、手の、やむを得なければ足を加えて、指の数以下にすべきだ」とか「料理の皿数はできるだけ少くせよ」とかというような具体的な簡素化の必要を彼は『ウォルデン』のなかで屢々語った。そして、「より高い法則」では他の章におけるよりも高次元で簡素化への努力を説いた。例えば、「私は自分のなかに、多くの人びとと同様に、より高い精神生活と言われるものを志向する本能と原始的で野性的な生活を志向する本能とが同居しているのに気づいた。私は今でもこれらが自分のな

かにあるのを発見して両者を同程度に尊重している。私は善に劣らず野性が好きだ。野趣と冒険があるから私は今でも魚釣りにあきない。私は時には人生を野蛮に捕えて、一日を動物のようにすごしたい⁽⁴⁾と語ったのは彼独特のパラドックスというよりも簡素化への努力を示すものである。あるいは、「漁夫、猟師、木こりなどは林や野原で一日を送り、特別な意味で自然の一部分になっているから、仕事の合間に何かを期待して自然に近づく哲学者や詩人よりも自然をよりよく観察している。自然は彼等の前にはかくすところなく自然自身を見せてしまう。大草原の旅人は猟師である。ミズーリ河やコロンビア河の上流を通る人はわなをしかけて野獣を捕える人であり、聖マリアの滝に遊ぶ人は漁夫である⁽⁴⁾」と語るソーロウは物質文明に毒された人間は人為的で複雑な労働に没頭して人生の意義を理解できないのだと考えたのである。しかし、単純であることだけがソーロウの目的ではなかった。漁夫とか猟師として得た自然に関する知識は善へ向かう第一歩ではあっても、究極的な目的ではない。彼は漁夫や猟師は、本質的には科学者と同じ知識と経験の道の旅行者で、多くの人びとは人生の初期には漁夫や猟師であって、より高い知識を身につけると、それぞれ異った道を行くものだが、多くの人びとは目先のこと以外には注意しないものだ⁽⁴⁾と批判した。彼は人生を変化するものとして捕え、簡素化への努力というテーマから進歩という観念を導き出した。

第二のテーマは、人間がもつ二重性の認識である。ソーロウは二極点として、精神的で純粋なものと動物的で不純なものとを指摘した。すべての人間がもつ純粋性 (the good=the higher laws) と野蛮性 (the wild=the sensuous) という二極点は相互に動的な関係において存在し、野蛮性から純粋性へ移行すると彼は考えた。この変化を彼は進化と捕えたので、彼の純粋弁護と不純非難には、両者を対立的に捕えたピューリタニズムは見られない。より高い法則に精神が従う時には不潔で肉欲的なものでも清浄で純粋なものに変化すると彼は考えた。清浄な靈魂は生命が閉じこめられている因襲の殻を破って現われるというのである。つまり、表面を通して実体を、多を通して一を、見るのである。彼によると、自然は機械的ではなく有機的であって靈魂の力に満ちている。これはエマソン考え方と同じであるが、両者は自然に対する接近法が全

く異っていた。書斎の勝負師エマスンは観念論で自然世界を見事に消し去って、精神世界だけを残したが、森の行者ソーロウはエマスンの観念論を拒絶して最後まで自然に立ち向かい続けた。「より高い法則」に見られる哲学的感覚は、根本的にはソーロウ独自のものではなく、エマスンの『自然論』に教えられたものであった。両者を比較すると、ソーロウはエマスンよりも、より詩的であり、より多く隠喩を使っている。

第三のテーマは、人間がより高い法則から受け取るかすかな暗示についてである。ソーロウの精神的自叙伝の縮刷版と言われる「より高い法則」のなかには彼の宗教的洞察が暗示されている。ピッカードはこの章を聖アウグスチヌスの『告白』に比較した。この章でソーロウは詩的直観と隠喩的洞察によって精神的現実を論じた。はじめの部分において、彼は、より高い生活である精神生活へ向かおうとする本能を自分のなかに見出した。彼が社会法則や経済法則の基礎に精神法則の存在を認識したところである。ソーロウは「もし、人間が自分の本能のかすかでも不断の暗示に耳を傾けるならば、それがどこまで——気が変になったかと思われるほどまで——その人を導くか想像もできない。その人が一層かたく決意して、その暗示に忠実になるにつれて、その方向に進むべき道があることがわかってくる」と述べた。彼が言う本能の暗示とは、ノーマン・フォスターが「ソクラテス風の内観」と呼んだものと同じであり、エマスンが「窮極の内的実在」と言ったものと同じである。ソーロウ自身が「毎日の生活の真の収獲は朝と夕の色彩に幾分か似ていて、手にふれ難く、言葉に表現しにくい。それは私が手に捕えた小さな星屑であり、虹の一片である」と語り、「世界全体を震わせる堅琴の調べのなかで我々を共鳴させるものは善を主張する調べである」と述べているものである。ウォルデン生活はソーロウの理念の実践であったが、外面的な意味では明らかな失敗であった。彼は余りにも人生の単純化を考えすぎたので、真実探求という目的のかすかな手がかりを発見することはできたかも知れないが、「ここには文明世界への道はない」ということになって、ウォルデン生活と現実が無関係なものになっていることを知らされた。そして、自分は青春の活力をもたらししてくれる女神ヒービー(Hebe)の信者だということに気づいた。この時の一種の敗北感は、瞬間であったに

ても、ソーロウに孤独の深淵をのぞかせたに違いない。ウォルデン池畔を去ったからのソーロウは、個人主義者という限界を破ることはできなかったが、コンコードの社交界でかなり積極的な活動を開始した。

ウォルデン池をエデンの園に譬えたソーロウであったが、実はウォルデン池は天国への一手段ではあっても、安住の地ではなかった。慎重なソーロウは心のなかに別のウォルデン池を作っていた。彼はウォルデン生活を始める4年前に独立を宣言するために農場を購入しようとした。しかし、経済的に不可能であったので、これを精神的耕作に切りかえた。つまり、『ウォルデン』の自然観察は彼の物質世界を超越した直観によるものであって、ここに描かれているのは同時に精神世界であった。彼は具象化された自然世界を描くと同時に神秘的な精神世界を描いたのである。とくに、より高い法則について語りかける文章は物質と精神という両世界の特質を併せもっていて、簡明で合理的であると同時に、複雑で神秘的である。ソーロウが『ウォルデン』の終り近くで次のように書いたのは、この意味においてであった。「あなたの言葉を他人が理解できるように話すことを、イギリス人なり、アメリカ人なりが求めるならば、それは馬鹿げたことだ。人間も、きのこも、そう簡単に育つものではない。」しかし、ソーロウにとっては、人生の目的は個人的とか自然的であればいいのではなくて、人生を支配するより高い法則を発見することであった。そのためには、自然に接近する時に「自然は克服するのに困難なものであるが、克服しなければならぬ」と「より高い法則」のなかで書いた。しかし、彼は精神世界がその奥に存在すると信じながら自然の壁を打ち破ろうとして敗退した。彼も現実の壁の背後に迫ろうとして敗北したエイハブであった。

IV 東 洋

「より高い法則」のなかでもっとも重要なことは「光」と「神の雫」と呼ばれるウォルデン池の純粹さと透明さがこの法則を具象化したものだという点である。ウォルデン池についてソーロウは「この水は昔ながらに緑色で透明である。これは断続する泉ではない。ことによると、アダムとイヴが楽園を追われ

た春の朝、ウォルデン池は既に存在していて、霧と南風とに伴なわれた春雨のなかで、その氷がとけはじめ、水面には、このような清浄な池に満足している幾万もの水鳥が人間の墮落も知らずに群がっていたかも知れない。その時、既にウォルデン池は水蒿の増減をはじめていて、その水を浄めて現在見るような色をおび、地上における唯一のウォルデン池であること、そして、天上的な靈魂の蒸溜所であることの特許を天から得ていた。どれほどの記憶にない民族の文学作品において、この池が詩神の泉カスタリアになったことか。古代のあの理想的黄金時代には、どのような水の妖精達がこの池を支配したかを誰が知ろうか。ウォルデン池はコンコードがその冠につけた最高の宝石である⁽⁶⁷⁾と書き、また、「ホワイト池とウォルデン池とは清浄すぎて市価をつけられない。それらは、少しの不浄も含んでいない。それらはわれわれの生活よりも、どれほど美しく、われわれの人格よりも、どれほど透明なことか。われわれはそれからいささかの卑しさも発見できない⁽⁶⁸⁾」と書いた。彼は『ウォルデン』において池の外側から清浄無垢な内側を書いた。物質文明と社会体制に反抗したソーロウにとって価値ある改革とは内側の改革であった。あくまでも自主独立の精神をもち、既存道徳を無視する態度で生きることを彼は人間に求めた。彼は調和した生活を求めず、个性的で野生的な生活を維持するためには人間相互の闘争をも否定しなかった。彼にとって、人間は宇宙的存在であって、社会的存在ではなかったのである。彼は個人を直接に宇宙と自然に結びつけ、個人相互の横の関係を認めなかった。『市民の反抗』に於て「私は世のなかを特別に住みいい場所にするために生まれてきたのではなく、よかろうが悪かろうが、そのなかで生きてゆくために生まれてきたのだ⁽⁶⁹⁾」と語り、「ハックルベリーの丘に立つと州なんか見えなかった⁽⁷⁰⁾」と書いた。彼には社会問題は眼中になかったから、ジェファスンの「最も少なく治める政府が最良の政府である」という言葉を一歩も二歩も進めて、「全然治めない政府が最良の政府である⁽⁷¹⁾」と言ったのである。この言葉だけを見ると、彼をフリー思想⁽⁷²⁾の流れを汲む啓蒙的アナキストだとも、個人の力を重視したスティルナーに近い自由主義者だとも言えるかもしれないが、それは誤解である。こういうソーロウだからこそ、「より高い法則」のもっとも注目すべき点は、人間と無関係な自然のなかでは理想実現は不可能だ

から、社会と文明のほうが孤独と自然よりも適当らしいということを暗示した点と宗教への一種の憧れを暗示した点とである。「より高い法則」におけるソーロウの態度を見ると、「もし、私が荒野に住むことになったら、本気で漁夫や猟師になりたいという気持になるだろう」と退歩を予想している点に注目しなければならない。また、この章において彼が暗示した宗教は東洋の宗教に近いものだと想像されても、『ウォルデン』は決して宗教的ではない文学作品である。『ウォルデン』には東洋風な色と音と形が感じられることは否定できない。ウォルデンの風景は、その松葉の長さは違っていたが、私には日本の東北地方を思わせた。この作品に見られる色は墨絵のようなと言えるほど抑えられた色である。音は単調であり、形は平面的である。「この小さな湖は8月の静かな雨の合間には、もっとも趣きの深い友人になる。その時には、空気も水も静まりかえって空だけが雲におおわれ、日盛りの時刻が夕方のような落ちつきをもち、つぐみがあたりで啼き、さらに岸から岸へ聞こえてくる。このような湖はこういう時にもっとも鏡のようである。湖面の上の空気の澄んだ部分は狭く、暗い雲が迫っているので光とその反射に溢れた水面は一層尊く見える地上の天になる」とか、『ウォルデン』の風景は控え目で、たいへん美しかったが、雄大というには遠くて、長期滞在するか、住みついた人でないと強い関心はもてない。……魚が遠くの空中で3、4フィートの孤を画くことがある。水を飛び出したところに一つのきらめきが起こり、水に落ちるところにもう一つのきらめきが起こる。時には銀色の孤が全部見えることもある。……この池では、あやめが岸边全体に生え、6月になると蜂鳥が訪れる。この青みの勝った葉と花とは、とくにそれが水に映った姿は、緑色の水と何とも言いようのない調和を示している」というようにソーロウは書いている。池の風景は池の身体で、音は池の言葉で、感じは池の心である。

「今日、この夏の昼さがり、窓辺にいと、鷹が私の畠の付近で輪を画いている。私の視野をかすめて2、3羽とんだり、家の背後の白松の枝にせわしなくとまる野鳩の翼が大地を鳴らしている」とか、「湖のすべての木の葉、小枝、石、くもの巣は、今、午後のなかほどだが、春の朝の露に濡れたように光っている。オールの一つ一つの動きも虫の動きも光のきらめきを作る。もしオール

が水中に落とされると、何という美しいこだまが生まれることだろう」とか
書いている。また、「時には松林を散歩する。松は神殿のように、あるいは、
うねる枝をもち、光でさざなみ立つ、すっかり艦装した海の船隊のように、や
さしく、緑色に、深い影を落としている」⁽⁷⁹⁾とか、「11月である。北風は池を冷
やしはじめた。……池が一面に氷ってしまう数日前、いや、数週間も前から、
そのもっとも日陰の、そして、一番浅い入江で、表面の薄氷が水面に張りつめ
た。はじめの氷はとくに興味があり、完全で、かたく、黒っぽく、透明で、水
底の浅いところを調べるのに絶好の機会を与えてくれた。わずか1インチの厚
さの氷の上に水面の水すましの⁽⁸⁰⁾ように長く寝そべて、わずか2、3インチ先
の水底をガラス越しの絵のように眺めることができた」などと語っている。さ
らに、「ウォルデン池の小がますが氷の上に横たわったり、漁夫が氷の上に水
が入るように作った小さな穴のなかに小がますがいるのを見ると、私はいつも
おとぎ話の魚のような稀な美しさに驚かされる。……その魚の色は松の緑色で
もなく、石の白色でもなく、空の青色でもなく、そういうのが世の中にありう
るなら、もっと貴重な花や宝石のような色をもっているように私には見える。
まるで真珠であり、ウォルデンの水が動物化した結晶のようである。……彼等
は動物界の小さなウォルデン池である」⁽⁸¹⁾と述べるようなところは箱庭的な美し
さをもっている。以上のような例を『ウォルデン』のなかに見つけることは極
めて容易である。ソーロウが自分の心の白い画布に描いた絵は不思議に東洋的
である。ウォルデンの風景だけでなく、彼の感覚も東洋的であった。しかし、
「より高い法則」の後半で彼は東洋の思想家の言葉を引用しているが、それ以
上のものはなく、彼の宗教性と言っても宗教そのものとは無関係である。結
局、より高い法則とは禁欲生活のことにすぎない。彼は物質世界に対しても、
精神世界に対しても、極めて不十分な認識をもつにとどまった。自分の周囲を
細かく観察しようという気持が強すぎて、社会を広く展望することができな
かったからである。しかし、彼は本能的に神秘的なものに惹かれたので、山嶽宗
教的なものに関心が強く、数冊の印度思想に関するパンフレットを興味をも
って読んだらしい。しかし、宗教とか東洋とかに特別な関心があったわけでは
なくて、晩年にはこういうものに全く興味を失ってチャムリーから贈られた東洋

に関する44冊の書物も彼は読まなかった。⁽⁶⁴⁾ソーロウに対する印度思想の影響を強調したり、彼をニュー・イングランドのヨガ行者と呼んだりするのは誤解である。例えば、クリスティの研究にしても、クルーチの説にしても、全面的には賛成できない。ソーロウを東洋的な神秘主義者にしているコップの意見⁽⁶⁵⁾になると、ほとんど理解できない。ソーロウには東洋風なところが偶然あったという程度だと結論できる。

V 二 面 性

ソーロウには常に二面性がつきまといっている。1849年に初対面のコンコード・グループの道德主義者ウォッスン牧師は随筆集のなかでソーロウを高く評価した。両者の社会観は正反対であったが、個人のなかに精神生活の真髓が存在すると考えた点で両者の意見は一致していたからである。ウォッスンによれば、社会的であることが人間の特徴であり、長い年月をへて現在の人間ができたのだから、社会の刺戟を絶えず受けてきていると同時に、社会に対して刺戟を絶えず与えてきたというのであった。それゆえに、ウォッスンにとっては道德こそ不可欠のものであった。⁽⁶⁶⁾これに対して、ソーロウは道德とは不健全なもので、罪を悔いる人は勇敢ではあり得ないと主張した。未来のために現在に生きることを信条とするソーロウにとっては、他人の批判に熱中することは無意味であった。ソーロウは、「隣人達が善だと言うことの大部分を私は心の奥で悪だと信じている。もし、後悔することがあるとすれば、おそらく、それは私の善行のためである。あれほど善良に振舞うとはなんという悪魔にとりつかれたことだろう」と言った。自分のことだけに専念すべきだと考えたソーロウから見れば、教会も政府も正面から立ち向かうだけの価値がなく、「それらを否定する役目は自分の背中にまかせればよい」⁽⁶⁷⁾のであった。もし、自分と融和しない対象があれば、不本意でも立ち向かわざるを得ないから、彼はそういうものに対面する必要がない場所にかくれて孤独になることを望んだ。どれほど長く生きた人でも失っただけのものを獲得してはいないし、長生きしても他人に与える助言をなにひとつもってはいない。人生の収支決算は赤字か零かである。

人間の経験は局部的であり、しかも、そのすべてが惨めな失敗にすぎないとソーロウは信じた⁽⁶³⁾。さらに、社会の影響を無視することが人間形成には必要だとさえ彼は考えた。ソーロウは生涯の大部分をコンコードで過ごし、少数の人びとと交際し、自分の道を直進したので、社会に対する彼の視野は驚くほど狭かった。この点を理解して、純粋なソーロウをウォッスン⁽⁶⁴⁾は賞賛したのである。この点を理解しなかったホイットマンはソーロウを病的なまでの人間嫌いだと誤解し⁽⁶⁵⁾、オールcottは、「彼ほど純粋に自然児と呼べる人間はない⁽⁶⁶⁾」と賞賛はしたが、うぬぼれのために社会を忘れて極端な個人主義に走った人間だと批判した。

ソーロウは人間嫌いというのではなくて、魅力を感じた人には進んで交際しようという積極性をもっていた。「私は生まれつきの隠者ではない。必要なら酒場の主人も顔負けするほどの長話に興じることもできる⁽⁶⁷⁾」と彼は言った。人間の能力は社会に依存するのではなくて、個人の精神世界に眼を向けた瞬間から発揮されるのだとソーロウは考えた。それゆえに、友人関係を増加したり、複雑化したりしても無駄で、有効な程度の友人をもてばいいと考えた。この個人重視の考え方や簡易生活とを結びつけて、彼は自由を最重要視した。彼の簡易生活は、原始生活や貧乏生活や貯蓄生活ではなく、真実追求の精神生活であった。娯楽とは主体性を犠牲にして商売人の計算にだまされるものだと考えたから、彼は娯楽一切を拒否した。

『一週間』や『ウォルデン』や『マサチューセッツの博物誌』⁽⁶⁸⁾などに見られる自然詩人ソーロウと『市民の反抗』や『ジョン・ブラウン隊長弁護』などに見られる社会批評家ソーロウを比較してみると、彼の本質は間違いなく前者にある。個人の心の改革を求めることに終始したソーロウは、ブルック・ファームやフルートランズなどという当時流行の新しい村運動の精神に賛成はしても、実際に参加するということとはなかった。ウォルデン生活で示されたソーロウの政治無関心は『市民の反抗』で一変したように見えるが、実はそうでない。ソーロウは外見的には彼なりの政治観を披露した。この無抵抗主義と反抗精神（実は無関心である）がガンジーやアメリカの黒人運動指導者達に共鳴された。『ジョン・ブラウン隊長弁護』では、純粋な人びとの急進的改革支持者

ソーロウは、ブラウンの行動に共鳴したからブラウンを弁護したのであった。ブラウンが実力行使によって悪と戦ったハーパーズ・フェリー事件をソーロウは正当だと評価し、保身に汲々とする政府や市民達を非難した。しかし、彼は自分の主張を続けはしたが、ブラウンを実際行動によって援助することはなかった。ソーロウには政治問題の現実的解決に参加する意志は毛頭なかったのである。講演「ジョン・ブラウン隊長弁護」を作品として読むと、伝記的誤解があったりして粗雑である。また、ソーロウはブラウンをよく知っているような話しぶりをしているが、これも事実ではない。ソーロウはブラウンに2度会ったにすぎない。最初はサンボーンの家で顔を見た程度であった。2度目は1857年にサンボーンのはからいで、ゆっくりブラウンと語ることができた。サンボーンは、その時の様子を「約束の日の正午にブラウンはボストンから到着して、当時、父の家族の一員として駅があまり遠くないところに住んでいたソーロウの家で食事を共にした。ブラウンとソーロウという2人の理想主義者は奴隷制度を援助する政府に反抗していたので、初対面から友人になることができた。食後に2人がカンザスにおける国境戦のことや、それにブラウンが参加したことなどを話している時、エマスンが用事で来訪した。こうして3人は同じ屋根の下で語りあい、エマスンとソーロウは、ブラウンが心のなかでもっとも大切にしていることについて意見が一致した」と書いている。ソーロウは、講演ではブラウンと奴隷解放問題を扱っているように見えるが、実はそうではない。この講演の特色は、ソーロウがブラウンに共鳴して、彼の名誉挽回に尽力しているように見せかけ、ブラウンの戦略家ぶりを強調しながら、（ブラウン調査の不備や粗雑さを気にしたのかも知れないが）意外に低姿勢な態度で話を進め、「われわれ（we）」という主語を用いて演壇と聴衆の一体化を計ったことである。実は、この講演はブラウンの名を借りたソーロウ自身の煽動的演説であった。前に、この講演が粗雑なために批判されてもやむを得ないと言ったが、それは半分間違いである。つまり、この講演は聴衆に訴える力強さが重要なのであって、ブラウンに関しては粗雑でいいのである。改革者ブラウンの意見はある程度どうでもいいのであって、簡素や粗野や象徴に頼って真実を追求したソーロウ自身の意見であったことに注目しなければならない。そのため

に、ブラウンの正しい伝記は無用であり、ソーロウが好ましいと思うブラウン像を描きさえすればよかった。実は、ソーロウはブラウンという人間を無視して、ブラウンが抱く理念に賛成したにすぎない。さらに、ブラウンを利用してピューリタンと西部開拓者を結びつけようとさえした。ソーロウは、「今、私はブラウズという名を聞くと、——この名はよく耳にするのだが、——また、とくに勇敢で真面目な人の名を聞くと、まず、ジョン・ブラウンを思い出し、その人がブラウンと関係があるのではないかなどと考える。私は至るところでブラウンに出会う。彼は生きていた時よりもはつらつとしている。彼は不滅の生命を獲得した⁽⁹⁾」と書いた。さらに、この講演においては、世間にはいろいろな種類の奴隷がいると言って時間的にも空間的にも広い視野をソーロウは見せた。これは、彼にとっては、野性や精神は関心の的になったが、現実の政治問題は関心の的にはならなかったことの証拠である。「先日、白い水蓮の香りをかいで、私が待っている季節が来たことを知った。この花は清純の象徴である。……この花の香りは、なんと私達の希望を強めてくれることであろうか。奴隷制度と北部の人びとの臆病と無節操にもかかわらず、この花のために、この世に急いで絶望するのはよそう⁽⁹⁾」とか、「奴隷制度とか奴隷根性とかは真の生命をもたないから、人間の感覚を楽しませるような香りのいい花を毎年咲かせることはできなかった。それはただ衰退であり、死であり、健康人の鼻には不快な臭いにすぎない⁽⁹⁾」などという文章がソーロウの真意を物語っている。

ウォルデン生活では、瞑想によって、社会の基礎をなしている個人の精神中枢に到達できると考えて彼は自分を見つめていた。新しい村とか孤独の生活とかは当時の一部の人びとの間では流行していたから、エマスの所有地を借用したウォルデン生活はソーロウだけの特別のものとは言えない（エマス自身もウォルデン池畔で孤独生活を試みることを考えたことがある）が、それでも、ソーロウは19世紀の生活リズムの流れからはずれた道を歩き続けた変人であったに違いない。ウォルデン池には底がないという伝説を彼はくり返し述べているが⁽⁹⁾、それは深さと純粹さを高く評価したからにはかならない。ソーロウは浅薄で不純に思えた社会を嫌い、無政府主義者ではないと『市民の反抗』のなかで断ってはいるが⁽⁹⁾、政府の干渉を嫌い、政府を無用だと考えた。

自然のなかで禁欲的生活を送る個人主義者ソーロウという面と正義の社会批評家ソーロウという面の両生活態度が彼の内部にはひそんでいた。しかし、ソーロウが本気で相手にできるものは、大空のように個人を溶かしてその一部として吸収してしまうようなものでなければならなかった。そういう相手に直面した時には、生活苦から解放され、人間は無限に拡大して、個人ではなくなり、罪や向上や道德とは無縁の融和の世界にしたって、もやのなかに溶けてしまうようになると彼は考えた。しかし、政府は素朴な融和の世界とは反対の緊張を強制する違和感だけの人工の世界であった。しかし、そういう人工の世界が迫ってきた時には、不本意でも彼は対抗せざるを得なかった。多分、こういう点を捕えて、エマソンはソーロウを Yes よりも No を多く言う男だと批判したのであろうが、それは必ずしも当たらない。エマソンがソーロウに捧げた弔辞(弔辞)のなかで、「対立のなかに身を置かなければ、自分を意識することがないかのようであった」と述べ、それに加筆修正を加えた文章(文章)のなかで「ソーロウは感情を意志で抑制した風変りな禁欲主義者であった」と書いた。オールcottはこの誤りを指摘して訂正しようとしたが、エマソンほどの影響力をもたなかったから人びとに無視された。ソーロウは決して禁欲主義者ではなかった。エマソンはソーロウの二面性をよく知らなかったのである。

エマソンのものとは違って、ソーロウの自然観は極めて現実的な自然観であった。彼はあくまでも博物学者的観察を前提として自然に直面した。彼は観念的ではなく、物を物として眺め、その価値を認めた。真実探求を具体的な自然観察を通して行なうソーロウの態度はエマソンの態度とは全く異っていた。ソーロウがもっとも愛したものは、文明に汚染されていない大森林(森林)であった。両者を比較検討したポートはエマソンを倫理と道德を重視した保守主義者、ソーロウを陶醉を愛した審美主義者だ(審美主義者)と書いた。キャンビーは「素朴な人びとに対しては、ソーロウは優しくユーモラスであった。その時には、彼の刺は影をひそめたが、それは刺を刺激するような高慢や気取りや卑屈がそれらの人びとにはなかったからである」と書いた。両者がソーロウびいきだとしても、いずれも彼の本質を捕えたものと言える。幻想にすぎない日常生活から逃れて、朝の光に包まれた自然界の絶対境に入ることがソーロウの願いであった。「ソーロ

ウにとって至高善とは歓喜のことであり、彼の良心を最も満足させる瞬間とは自然との恍惚とした交わりの瞬間であった」とクルーチが書いているのは、その通りである。彼自身の言葉を借りれば、彼の至福の世界とは、「甘美な夕べだ。全身がひとつの感じになって、すべての毛穴から歓喜を吸いこんでいる。私は自然のなかを自然の一部になって不思議なほどのびのびとさまよう。……私の注意を特別に惹くようなものはなにもなく、自然のなかのすべてのものが不思議なほど私とじっくり結びあっている」というものであった。しかし、実際には、融和しない物質世界と精神世界との間にはさまって両世界の統一を計ろうとして、物質世界を捨てきれないソーロウは苦悩した。観念論者エマスのように、自分の世界を創造して物質を支配するということはソーロウにとってできないことであった。精神も物質も捨て切れないということは自分の立場がなくなるということである。そうなれば、積極的に自分の立場を捨てる以外に方法はないであろう。自然と融和するためには、自分の立場を捨てて自然の一部になりきるという受身の姿勢が必要である。「自己信頼とは神への絶対的帰依のことである」と言ったエマスと同様に、ソーロウも偉大なものに対面した時には、自由とは服従することだと考えるようになった。

VI 旅路の果て

ソーロウは旅路の果てに荒涼とした物質世界に直面して、「この荒涼とした風景を貫いて純粹で絶対的な永遠の旋律が聞こえてくるようだ」と書いた。『メインの森』の第一部「クタードン」を貫くイメージは野獣が吠える荒野である。文明が侵入していない原始の森では、人間社会や制度を非難もできず、悪の根源に直面しなければならなかったと彼は回顧した。この悪の根源とは自然そのものかもしれないが、人間のなかにあるものかもしれない。やがて彼は無味乾燥で索莫とした自然観察の断片で晩年の日記を埋めた。彼は最後まで神とは無関係に生きた。『ウォルデン』に書いたように手足が冷えてゆくのを実感し、生から死への移りゆきを体験しようとした。生命ある限り真実を求める意志を貫き通したソーロウは木のような岩のような人間になった。

ウォルデン池という目を通して精神世界を見つめたソーロウは精神重視の方向へ文明社会の潮流の方向転換を策して敗北した。ソーロウは一枚の板で大河の流れを逆転させようとした男であった。物質文明に汚染された人びとは、光と神の雫であるウォルデン池と同様に現実離れのした透明な『ウォルデン』を神の妙薬として読むのである。この点を捕えて、ホームズはソーロウを「時代の流れに逆らった文明破壊者」と呼んだのであった。しかし、これとは反対に、ヘンリー・ミラーは「随落した文明社会から見ると、ソーロウは昔のローマ人のようだ。美德という言葉はソーロウの名前に結びつけられると、再び意味をもって来る」とソーロウを賞賛した。

ソーロウは自分の生活を孤独の生活だと思いこんでいたようなところがあるが、実際には、彼の孤独は呼べば答えが返ってくる孤独であった。物質的にも精神的にも援助してくれる友人があった。自分に満足したソーロウを独善的だと批判する人はソーロウを羨望する人ではないかと思われる。ソーロウが「生活を単純化するにつれて、宇宙の法則も複雑ではなくなり、孤独は孤独でなく、貧困は貧困でなく、虚弱は虚弱でなく、空中楼閣を築くことも無益ではない。楼閣は空中にあるべきものである。その下に土台石をさしこめばいいだけである」と言った時、自分の世界は空中楼閣であることを夢想家ソーロウは認め、それと現実を結ぶためには土台石をさしこめばいいのだと実行家ソーロウは信じた。そして、結局、彼は土台石をさしこめないで敗北した。しかし、彼がソーロウというあまりにも鮮明な旗印を押し立て、満足だという言葉を残して世を去るまで、致命的な不平不満を知らずに生き抜くことができたことは幸運であったと言えるであろう。大西部に死んだ平原児レザー・ストッキングも、「おおザンテの花よ！」と歌ったボーも、モウビィ・ディックに槍をつけたエイバブも、エマスンも、ソーロウも、すべて真実を追求して敗北した19世紀前半のアメリカ文学の花であり、星であり、夢であった。真実とはなにか。それは永遠の課題であり、所詮は夢にすぎない。自己満足であろうとも、夢こそ、空中楼閣こそ、唯一の真実である。

付 記

ワシントン・ポスト紙のコルマン・マッカーシーは『ウォルデン』を「健全な社会観、歴史観、明晰な文章、鋭い批評など、ソーロウは隣人の目をさます雄鶏のようなアメリカ文学の巨匠の一人だ……今や文明の過剰な豊かさがアメリカを破滅へと導いているので、「単純に、単純にせよ」という『ウォルデン』の言葉を顧みなければならない。昔、ソーロウはコンコードの人びとを哀れんで、「自分が使う道具の道具に人間がなっている」と言った。現在、われわれに必要なものは新鮮な空気と霧だ⁰¹⁰と実行困難だがもっともなことを書いている。また、ノーザムプトンの「日刊ハムプシャー」に「ウォルデン池で」という一文⁰¹⁰があった。その要点はこうである。ウォルデン池検討委員会会員でアメリカ・ソーロウ協会元会長のロビンズは溜息をついて、「見給え、ビールの空かん、煙草の吸殻、犬猫の騒ぎ、森に唸るオートバイ、ヌード遊泳者など……」と語った。417エーカーのウォルデン地域の正しい使用法について長い議論が重ねられた結果、50年間郡立公園であったこの地区は1975年に州立公園に移管された。ロビンズによると1970年代にウォルデン池周辺の騒音がひどくなったということである。州環境局はソーロヴィアン達の要求とレクリエーションにここを訪れる年間のべ632,000人の要求をどう調整するかが問題だと語っている。州森林公園局長ブリスによると、「ここは州立公園であり、この地域には水泳場が多くはない。今、水泳に使っているのは142エーカーの池の地域（ウォルデン池本体は61.5エーカー）のごく一端にすぎない。まだまだ野趣を残しているところが多い」ということである。ブリスはロビンズの指摘を認めて、警察活動を不活潑だと言っている。石碑がその所在地跡を示しているだけで、ソーロウが140年ほど前に作った小屋のレプリカが見当たらないのにがっかりする訪問者の声に対しては、「小屋を作っても破壊主義者や記念品収集マニアがそんな小屋を一晚でもほってはおきませんよ」というのが正確な小屋の位置を発見した郷土史家ロビンズの意見である。投光機とテレビ・カメラを備えた安全な小屋を作れという人びともいるが、それではソーロウの小屋の意義に

反してしまうだろう。

1922年にウォルデン池の地域の大部分を所有していたエマソンの子孫達が、この地域を特別保護地域 (reservation) としてミドルセックス郡に使用をまかせた。その時には水泳とボートを許可するが、球戯とオートバイ、キャンプ・ファイア、土地開発などを許可しないと特定した。昔、ソーロウ自身はこの池で泳いだり、ボートを漕いだりした。ほとんど無断で郡当局が100本の木を引き抜き、遊泳者のための道とハウスを作る目的で池の斜面を切り開いたのが1957年で、この時、ウォルデン池の使用をめぐる問題が起こった。道が出来れば、バスの観光客は池から70フィートのところで車を降りられることになる。人びとは怒り、ソーロウ協会は委員会を作ってこの開発に対抗した。ここを歴史研究に訪ねる人びとはニューヨーク、ミシガン、フロリダをはじめ遠く外国から来る人びとで、地元マサチューセッツの人びとは極めて少ないというのが実情であった。急進的なソーロウ愛好者達は「ウォルデン野趣保存委員会」⁰¹²を作って、この地域を州立公園としては使用させず、自然環境に戻せと主張した。しかし、エマソンの子孫 David Emerson 達はウォルデン地域の使用を、許可された少数者に限ることに同意しないと言明した。ロビンスは「公園使用料金2ドルを払おうとしない人達にはどう対処すればいいのだ。この連中はソーロウの納税拒否の話を利用して、ソーロウならばこの公園使用料を強制する州当局を許さないだろうと抗議する。……ソーロウは市民の反抗をいいことだと信じていたが、自然の野趣を保護するということになれば、いささかの市民の服従を望むことだろう」と言った。

ウォルデン地域の保護は極めて困難な問題だと思われる。たしかに時代は驚くほど変った。しかし、いつの日か、ウォルデン池周辺に誰も来なくなるということが起こるかも知れない。現在から想像できる未来は時間的に知れたものである。過去100年間に多くのすぐれたソーロウ研究が発表されたが、それらはいつか踏み越えられてゆく里程標である。100年後には新しい『ウォルデン』の読み方もソーロウ観も生まれることであろう。しかし、今、私が思うのはソーロウは自己満足の人であったということである。そして、少数の聖人賢者がそう信じたように、人生の窮局は自己満足以外のなにものでもないと思われ

る。

(本稿はヘンリー・ソーロウ協会会長の任期2年満了に際しての私のソーロウ観である。)

註

- (1) Walter Harding & Carl Bode (eds.): *The Correspondence of Henry Thoreau*, New York U. P., 1958, "A letter to Orestes Brownson", 1837. 12. 30.
- (2) *Ibid.*, "A letter to Rev. Andrew Bigelow", 1838. 10. 6.
- (3) *Ibid.*, pp. 12—13.
- (4) *Ibid.*, p. 47. (エマソン夫人の姉ルーシー・ブラウンあての書簡, 1841. 9. 8.)
- (5) Henry Seidel Canby (ed.): *The Works of Thoreau*, Houghton Mifflin, 1937, pp. 248—49.
- (6) *A Week on the Concord and Merrimac Rivers*, Monroe, Boston, 1849.
- (7) *Works*, *op. cit.*, p. 305.
- (8) *Ibid.*, pp. 305—06.
- (9) *Works*, *op. cit.*, pp. 387—88.
- (10) Cf. *ibid.*, pp. 384—93.
- (11) Cf. *ibid.*
- (12) *Correspondence*, *op. cit.*, "A letter to Horace Greeley", 1848. 5. 19.
- (13) "Life without Principle", the *Atlantic Monthly*, 1863. 10. (1862. 2. 28. 送付)
- (14) *Ibid.*
- (15) Cf. John Aldrich Christie: *Thoreau as World Traveler*, Columbia U. P., 1965.
- (16) Cf. 「ヘンリー・ソーロウ協会会報」第15号。
- (17) Bradford Torrey & Francis H. Allen (eds.): *The Journal of Henry D. Thoreau*, Dover Publication Inc., N. Y., 1950, Vol. 2—4, p. 145.
- (18) Parker Pillsbury
- (19) Robert D. Richardson Jr.: *Henry Thoreau—A Life of the Mind*, U. of California P., 1986, p. 389. ("One world at a time.")
- (20) *Journal*, *op. cit.*, 1853. 10. 28.
- (21) *Walden*, Ticknor & Fields, 1854.
- (22) Ellery Channing
- (23) *Works*, *op. cit.*, p. 462.
- (24) Henry Seidel Canby: *Thoreau*, Houghton Mifflin, 1939.
- (25) The Thoreau Society (ある小グループが設立したもので、コンコードで年次大会を開催し、季刊誌と不定期小冊子をアメリカ内外にいる約500人の会員に配布した。)
- (26) 上記(注)とは別に1930年代末に North Carolina 大学の Raymond Adams が私

的に “Thoreau Newsletter” を適時に印刷して個人的に配布した。

- (27) James Russell Lowell
- (28) “Chesuncook”
- (29) *Ibid.* (“It is as immortal as I am, and perchance will go to as high a heaven, there to tower above me still.”)
- (30) *Correspondence, op. cit.*, A letter to James R. Lowell, 1858. 6. 22.
- (31) “Slavery in Massachusetts”, *the Liberator*, 1854. 7. 21. (1854. 7. 4. の講演である。)
- (32) Robert Louis Stevenson
- (33) *Journal, op. cit.*, 1842. 3. 23.
- (34) Oliver Wendell Holmes
- (35) F. O. Matthiessen
- (36) Sherman Paul
- (37) *Works, op. cit.*, p. 465.
- (38) *Ibid.*
- (39) William Ellery Channing
- (40) *Works, op. cit.*, p. 384.
- (41) *Ibid.*, p. 385.
- (42) Cf. *ibid.*
- (43) R. W. Emerson: *Nature*
- (44) John B. Pickard
- (45) St. Augustine: *Confessions*
- (46) *Works, op. cit.*, p. 388.
- (47) Norman Foerster: *Nature in American Literature*. (Studies in the Modern View of Nature), N. Y., 1923, p. 130, “the Socratic inner witness”
- (48) Cf. R. W. Emerson: “Self-Reliance”
- (49) *Works, op. cit.*, p. 389.
- (50) *Ibid.*, p. 390.
- (51) Cf. *ibid.*, p. 310.
- (52) *Ibid.*, p. 330.
- (53) *Ibid.*, p. 337.
- (54) Cf. Leo Stoller: *After Walden*, Stanford U. P., 1957.
- (55) *Works, op. cit.*, p. 459.
- (56) *Ibid.*, p. 392.
- (57) *Ibid.*, pp. 364—65.
- (58) *Ibid.*, p. 378.
- (59) H. D. Thoreau: “Civil Disobedience”

- 60) *Works, op. cit.*, p. 797.
- 61) *Ibid.*, p. 804.
- 62) Thomas Jefferson
- 63) *Works, op. cit.*, p. 789.
- 64) François Marie Charles Fourier
- 65) Max Stirner
- 66) *Works, op. cit.*, p. 387.
- 67) *Ibid.*, *Walden*: "Where I lived and What I lived for"
- 68) *Ibid.*, "The ponds"
- 69) *Ibid.*, "Sounds"
- 70) *Ibid.*, "The ponds"
- 71) *Ibid.*, "Baker farm"
- 72) *Ibid.*, "House-warming"
- 73) *Ibid.*, "The pond in winter"
- 74) Cf. 「ヘンリー・ソーロウ協会会報」第15号。
- 75) Arthur Christy: *The Orient in American Transcendentalism* (A study of Emerson, Thoreau and Alcott, Octagon Book, N. Y., 1972.
- 76) Joseph Wood Krutch: *Henry David Thoreau*, N. Y., 1974.
- 77) Charles Calvin Kopp: *The Mysticism of Henry David Thoreau*, 1963.
- 78) Rev. David Atwood Wasson: *Essays Religious, Social and Political*, Lee and Shepard, Boston, 1889.
- 79) *Ibid.*, p. 229.
- 80) *Works, op. cit.*, p. 250.
- 81) *Correspondence, op. cit.*, p. 313.
- 82) *Works, op. cit.*, p. 249.
- 83) Walt Whitman: quoted in *Thoreau, Man of Concord*, by Walter Harding (ed.), Holt, Rinehart and Winston, N. Y., 1960, p. 63.
- 84) Amos Bronson Alcott: quoted in Harding, *op. cit.*, pp. 41—42.
- 85) *Works, op. cit.*, p. 337.
- 86) *Natural History of Massachusetts*, 1842.
- 87) Frank Benjamin Sanborn (ハーヴァード大学を卒業して1855年にコンコードに住み、私立学校経営をはじめた奴隷制度廃止運動家で、ソーロウとは数年間にわたって毎日のように夕食を共にしたほど親しい隣人であった。)
- 88) *Works, op. cit.*, p. 825.
- 89) E. B. Sanborn: *Memoirs of John Brown*, 1878.
- 90) "The Last Days of John Brown", *the Liberator*, 1860. 7. 27. (1860. 7. 4. のブラウン埋葬式のためのもので、ソーロウの病気によって代読された。前年末頃に書

かれたものだと言われる。)

- 91) Cf. "Slavery in Massachusetts", *op. cit.*
- 92) Cf. *ibid.*
- 93) *Works, op. cit.*, pp. 364—65.
- 94) *Ibid.*, p. 790.
- 95) R. W. Emerson: "Thoreau", 1862.
- 96) Cf. *ibid.*
- 97) Cf. *Atlantic Monthly*, 1862, Aug.
- 98) Cf. "Ktaadn", 1865.
- 99) Cf. Joel Porte: *Emerson and Thoreau*, 1966.
- 100) Cf. Henry Seidel Canby: *Thoreau*, Beacon, 1958.
- 101) Joseph Wood Krutch: *Henry David Thoreau*, American Men of Letters Series, Methuen, 1948, p. 12.
- 102) *Works, op. cit.*, p. 330.
- 103) R. W. Emerson's Lecture, "Fugitive Slave Law" Concord, 1851. 5.
- 104) Cf. *Cape Cod*
- 105) Oliver Wendell Holmes: "the nullifier of civilization, who insisted on nibbling his asparagus at the wrong end."
- 106) Henry Miller: "viewed from the heights of our decadence, Thoreau seems almost like an early Roman. The word virtue has meaning again, when connected with his name."
- 107) *Works, op. cit.*, pp. 458—59.
- 108) Colman McCarthy: "Thoreau's advice for today: simplify", "Minneapolis Tribune", 1979. 4. 25. (Wed.)
- 109) "At Walden Pond", "Daily Hampshire Gazette", 1981. 6. 22.
- 110) Roland Wells Robbins: a member of Walden Pond Advisory Committee and the former President of the National Thoreau Society.
- 111) Gilbert Bliss
- 112) The Walden Forever Wild Committee